

# 伊奈波社報

伊奈波神社社報

【平成27年 7月号】 No.25



宵宮



伊奈波神社宮司

## 杜 東 道人

麗しい六月の豊かな緑に包まれた山野を見ると、大自然の美しさにくらばせも清しい好季を迎えました。そして、また氏子崇敬者の皆さまとともに巡ってきた今日の日に感謝のまことを捧げ、明日へと繋げてゆきたいものであります。

ここで、美濃国の神奈備（又は甘南備）について少し理解を深めて見たいと思います。さて、私が神宮皇學館神道教習科時代に、神宮欄宜櫻井勝之進教授が、民俗学者原田敏明先生の論文集『日本の社会と祭』（昭和四十一年四月一日刊）の巻頭で「了解を得て先生の神社祭祀に関して発表された云々」と識されているように、研究雑誌『社会と伝承』（昭和三十一年十一月一日〜同五十二年十二月一日全三十二冊）などに発表された論文を一冊に纏められたもので、それが櫻井教授の祭祀概論のテキストであった。その論文集を読み返してみると、「神のやしろ」部落祭祀の対象（一）（昭和三十六年十一月一日第五卷第一号）と題する一文に、次のようにある。

すなわちここでは山は祭をする聖地である。そこで森といっても山といっても、ただの山や森ではなく、宗教的に神を祭る場所であり、古くは神を祭る場所が多くは山をなし、森で覆われていたといってもよい。そういう場所を古くは「かんなび」という言葉を以って表わした。

という一文である。原田先生も神宮皇學館の教

壇に立たれ、集中講義をされたことを付記しておきたい。ところで、國學院大學教授・大場磐雄先生は、名著として知られる『神道考古学論攷』（葦牙書房・昭和十八年十二月十日刊）などの多くの著を遺されているが、美濃国の甘南備（かんなび）に着目され、『萬葉遺跡・美濃甘南備と石占』（甘南美寺・昭和三十年一月十七日再版）に先生は「神奈備の東限について」と題し、小論を記述されている。

更に東限は美濃国神名帳所載の従三位甘南備明神で（これを加へると十四となる。）現在の所自分の管見では、それより以東には神奈備の称を有する地名はない。と言及されている。上述の『神道考古学論攷』のなかで、

神奈備の語は記紀に見えず、出雲風土記や祝詞に見える所から、出雲系の人々が特に呼んだ名稱であらうかと考へられる。

と示唆される。原田敏明先生は、上述の論文集の中で、『万葉集』をあげられ、かんなびの山とあるのが十二回、淵とあるのが二回、河や小竹原、里、三田崖とあるのがそれぞれ一回づつ見えていると述べている。さて、美濃国の甘南備は大場先生が指摘されるように神霊の静まる場所であり、神奈備式靈山と称すべきである。出雲系或いは三輪系の人びとが辿り来たところが、最終の美濃国の聖地（甘南備）であったのであろう。このように民族の信仰の一端が神奈備の山名に残され、その神山の信仰祭祀と歴史が息づいて止まない国、それが美濃国神奈備と申せましよう。



## 神幸祭

四月四日(第一土曜日)神幸祭が斎行されました。正午、神幸乃儀がおこなわれ御鳳輦を中心に神職・巫女・役員総代・稚児等二二〇名が隊列を組み出発。そして儀装車にて主祭神五十瓊敷入彦命の輿様をお祀りする金神社へまたお子様をお祀りする櫃森神社へとそれぞれ御旅所祭が斎行されました。

途中、伊奈波・金・櫃森神社の神幸行列がひとつとなり、歩行者天国を勇壮に渡り御行列が進み、若宮町交差点においては三社御鳳輦を前に合同祭典が行われました。巫女舞に続き、式鶴舎の木遣り唄に併せ、岐阜芸妓組合による手古舞の奉納。最後に三社宮司が玉串を奉り、集まった市民の方々と共に岐阜市の安泰・発展を祈りました。午後四時三十分、本殿にて還幸祭が行われました。



御鳳輦



神樂奉納



三社宮司玉串奉奠

## 宵宮

四月四日午後六時三十分、高富青雲太鼓の音が宵宮の始まりを告げました。ボーイスカウト岐阜第16団の奉仕による踊山車に続き、金華1・3地区による安宅車、明徳氏子による若戎車、そして京町7地区による清影車が順に曳き込まれ、それぞれ山車、奉仕者らがお祓いを受けました。続いて、岐阜芸妓組合による手古舞を先頭に木造神輿、岐阜祭絆会、女神輿岐阜心女、ぎふ青年神輿、神輿愛好会まつしぐら、松阪太鼓、岐阜神加勢、岐阜睦、金華神輿が次々と広場に練り込まれ、競うように総練。次に安宅車・若戎車・清影車による「からくり」が奉納されるといよいよ終演を迎え、最後に仕掛け花火が打ち上げられました。



神輿

山車四輛(何れも岐阜市重要文化財)



安宅車



清影車



若戎車



踊山車

## 例祭

当社で一年を通して最も重大なお祭り「例祭」が四月五日、桜雨のなか斎行されました。午前十時、伊奈波雅楽会による雅楽演奏のなか宮司以下祭員、献幣使、責任役員、総代が参進。修祓、一拝に続き、宮司が御扉を開扉。献饌、そして本庁幣、氏子幣が奉獻されました。宮司祝詞奏上ののち、献幣使(林康司加納天満宮宮司)が金幣を奉り祭詞奏上。続いて、巫女による「榊の舞」「速神楽」が奉納され、宮司、献幣使に続き、岡本太衛右門責任役員をはじめ各代表者が玉串を奉り拝礼しました。一五〇名余りの参列のもと、皇室の弥栄・国家安泰、氏子崇敬者の平穏を祈り、厳粛かつ盛大に執り行われました。



参進



玉串奉奠



直会会場

例祭に際しまして、全国の皆さまより玉串料や献備品の奉納、ご祝辞・ご祝電を賜りました事、ここに厚く御礼申し上げます。

## 手古舞に御協賛頂いた皆様

- 四木会 会長 西川長正
- 戸島工業(株) 代表取締役 荒川晶一
- (株)西部管商 代表取締役 浦瀬武夫
- (株)ドライビングサービス 浅野茂樹
- (株)大石
- (株)岐阜造園
- あそファミリー歯科 阿蘇修
- すずや 長尾雅江
- 浅野辰夫
- (株)かわらや支店 (順不同・敬称略)



手古舞

## 夜桜雪洞ご協賛者紹介

- (株)オゼキ
- 琴楽楽器店
- 高橋金属(株)
- 大日コンサルタント(株)
- アルフレッサ日建産業(株)
- (株)ケミック
- 岐阜ダイハツ販売(株)
- 日本印刷(株)
- 人形の堀田
- 魅兵(株)
- 岐阜信用金庫美江寺支店
- 松山新聞舗
- 富士屋精肉店(株)
- 西村精肉(株)
- 岐阜シール印刷(株)
- 小畑ポンプ工業(株)
- 古川神具店
- 元坂酒造(株)
- 長崎屋本店
- 参集殿調理部
- (株)ときわや
- (株)大丸貸衣装店
- 瀬古写真(株)
- プロフォト岐阜
- 都写真館
- あららぎ花嫁着付研究所
- 小林漆陶(株)
- 松島屋
- 玉井屋本舗
- 亀甲屋本舗
- (順不同・敬称略)



## 筒粥神事

小正月の一月十五日午前九時、農作物や養蚕 天候を占う特殊神事が執り行われました。沸騰した釜の中に米一升と小豆十二粒を入れ、続いて竹筒二十七本を一緒に炊き込みます。その竹筒に入った米の具合を見て、米や麦の五穀に大根や南瓜などの野菜、養蚕二十七種が占われました。占いの結果は、花の撓大祭で発表されました。

## 左儀長神事

一月十七日八時三十分、神社下遷拝所前にて左儀長神事が執り行われました。注連縄・門松などの正月飾りを炊き上げるこの行事は、毎年多くの参拝者が、一年間の家内安全を祈り訪れます。またその火で餅を焼き無病息災を願う人などで賑わいました。

## 楓稲神社初午祭

三月三十一日午前九時三十分、境内に朱色の鳥居が並ぶ楓稲荷神社にて初午祭が斎行されました。当日は、鳥居の奉納者らが参列し、大神様のご神徳を慕い、事業繁栄・商売繁盛の願いを込め、玉串を捧げました。



## 花の撓大祭

三月十九日(旧暦一月晦日)午前十時、五穀豊穰・産業興隆を祈願する花乃撓大祭(祈念祭)が斎行されました。一月十五日に行われた筒粥神事の結果を発表し、神門内には、農作業に模した人形が展示されました。総代、神社委員、花の撓世話人らが参列し祈念しました。

下の図は、大正三年二月版画の人形の様子。



## 初鮎奉納

五月十二日、宮内庁式部職・山下哲司鶏匠が初鮎を奉納しました。前日の鵜飼開きで獲れた鮎(9cm×12cm)30匹が奉納され、十月十五日まで続く鵜飼の安全と豊漁を祈願しました。鵜飼はおよそ1300年の歴史があり、岐阜の夏の風物詩として受け継がれてきました。



## 大黒社例祭

五月十五日、大黒社の例祭が宮司以下祭員の奉仕により斎行されました。大黒様の商売繁盛、福徳田満、延命長寿などのご神徳を慕い毎年多くの参列があります。祭典後には、宝永六年(一七〇九)に祀られた御神像を拝し、大神様のお腹を摩る列が続きました。



## ご参拝紹介

- 二月七日 俳優篠田三郎氏
- 三月九日 寒川神社高座氏子総代会 宮司利根康教氏 外五十九名
- 三月十二日 法相宗大本山薬師寺 加藤朝胤氏 外十八名
- 四月二十九日 裏千家大宗匠千玄室氏



- 五月十七日 松尾神社敬神婦人会 丸山富子氏 外六十二名
- 五月二十日 新日本宗教団体連合会 中部総支部 田中庸仁氏 外三十二名



## 必勝祈願



三月十五日 県立岐阜商業高校 硬式野球部 三十二名



## 透塀・連棟社お屋根葺き替え

今年五月十九日より、神門内の透塀と連棟社の屋根銅板葺き替え工事が行われております。平成二十年に始まりました葺き替え工事は神門・回廊に続き、二十三年は拝殿・燈籠、二十五年には神饌所・校倉、そして昨年弊殿と続いてきました。今回は、第五期葺き替え工事といたしまして着手しております。

ご参拝の皆さまには、ご迷惑をお掛けしますが、ご理解・ご協力の程、お願い申し上げます。

今年九月完成予定



## 連棟社(現在、屋根葺き替え工事中)

- 大行事神社
- 峯八王子社
- 大神門社
- 后御前社
- 金神社
- 高山社
- 品部社
- (例祭日 九月十五日)
- 野宮八幡社
- 總神社
- 祖會路社
- 兒御前神社
- 大國主神社
- 楠神社
- 合殿





節分手筒煙火奉納

二月三日、二十三回目となる節分手筒煙火奉納祭が神社下広場で行われまし  
た。厄災を祓い無病息災を祈る奉納者の  
願いを込めた手筒煙火を豊川市古宿煙  
火講十九名の煙火師が奉仕し、乱玉・大  
筒・中筒・小筒計二七七本が打ち上げら  
れました。また、この手筒煙火がNHKで生  
中継され、多くの参拝者で賑わいました。  
ご奉納賜りました皆さまのお陰をもち  
まして盛大に斎行出来ました事、厚く御  
礼申し上げ、ここにご芳名を記載させて  
頂きます。



- 第二十三回節分手筒煙火奉納祭 平成二十七年三月三日
- 仕掛五一本 奉納者芳名**  
1 伊奈波神社ことぶき会
- 大筒七本 奉納者芳名**  
1 秋葉山本宮 秋葉神社  
2 株式会社銀行  
3 清水建設株式会社  
4 田中社寺  
5 藤トオヤマ  
6 布藤野醤油醸造元  
7 株式会社ヤマト警備
- 中筒二十七本 奉納者芳名**  
1 伊奈波神社役員 岡本太右衛門  
2 伊奈波神社役員 尾関秀太郎  
3 伊奈波神社役員 桑原善吉  
4 伊奈波神社役員 桑原善吉  
5 伊奈波神社役員 川島和男  
6 瀬古写真館  
7 立正佼成会岐阜教会  
8 岐阜早セラック製造所  
9 大日ミサルメント(株)  
10 蔵珍堂  
11 河田製帽(株)  
12 河田製帽(株)  
13 河田製帽(株)  
14 河田製帽(株)  
15 (株)三越  
16 (株)飯沼造園  
17 (株)秋江  
18 (株)神路社  
19 (株)小島商店  
20 京都奉製(株)  
21 奈良近畿戎協同組合  
22 伊勢絵馬  
23 グリーン産商(株)  
24 (株)西垣  
25 大松節子  
26 スペースマインドエネルギー  
27 (株)MKゴルフ

- 6 岩崎隆生 加藤政之助 松波隆生 林保徳  
7 岩崎隆生 小三三 武藤隆宏 吉良高康  
8 (株)英組  
9 四木会  
10 日比野家住宅保存会  
11 三楽 藤井商店  
12 日の丸自動車(株)  
13 津島建村(株)  
14 かわらや  
15 徳 広  
16 御嶽本教 信和館  
17 だるま堂製菓  
18 元坂酒造(株)  
19 酒徳昆布  
20 のやま亭  
21 岐阜信用金庫  
22 中島印刷  
23 ラ・パティスリー りぼん  
24 亀甲屋本舗  
25 玉井屋本舗  
26 森実木材工業(有)  
27 (有)かわらや支店  
28 (有)安藤商店  
29 (株)サン・アド  
30 内藤電機(株)  
31 讃岐うどん高松家  
32 東壽司  
33 両香堂本舗  
34 (株)とさわや  
35 あららぎ花嫁着付け研究所  
36 (株)小林漆陶  
37 プロフォト岐阜  
38 (株)大丸貸衣装店  
39 T.A.E.設計室  
40 都写真館  
41 伊勢ハルセンター  
42 御福餅本家  
43 伊勢一見岩戸館  
44 創建設計(株)  
45 阪本製菓所  
46 広瀬織布(株)  
47 (株)伊藤紙器  
48 廣瀬工務店  
49 あそファミリー眼科  
50 あそファミリー歯科  
51 茶道裏千家淡交会岐阜支部  
52 茶道裏千家淡交会岐阜支部
- 53 和歌山小椋幸導学会  
54 小椋 妙寛  
55 小椋 千代  
56 檜皮 雅夫  
57 檜皮 美和子  
58 中尾 美代子  
59 岩崎 洋文  
60 山下 幸和  
61 山下 正弘  
62 上野 喜代子  
63 上野 耕三  
64 上野 耕作  
65 林 俊行  
66 岡本 麻子  
67 岡本 友章  
68 岡本 真美  
69 岡本 玲奈  
70 岡本 知香  
71 岡本 知香  
72 谷上 勝巳  
73 谷上 明美  
74 中野 知道  
75 中野 千恵子  
76 岡田 佐右吉  
77 岡田 静江  
78 岡田 勝宏  
79 岡田 勝宏  
80 岡田 智子  
81 岡田 智子  
82 林 武雄  
83 林 三子  
84 山下 敬一  
85 山下 美佐子  
86 山下 美佐子  
87 海瀬 清光  
88 海瀬 清光  
89 海瀬 歩次  
90 栗山 久  
91 栗山 真理子  
92 栗山 透  
93 栗山 透  
94 栗山 透  
95 栗山 透  
96 栗山 透  
97 栗山 透  
98 栗山 透  
99 栗山 透

- 100 廣 親宏  
101 沼田 親宏  
102 沼田 親宏  
103 沼田 親宏  
104 沼田 親宏  
105 沼田 親宏  
106 沼田 親宏  
107 沼田 親宏  
108 沼田 親宏  
109 沼田 親宏  
110 沼田 親宏  
111 沼田 親宏  
112 沼田 親宏  
113 沼田 親宏  
114 沼田 親宏  
115 沼田 親宏  
116 沼田 親宏  
117 沼田 親宏  
118 沼田 親宏  
119 沼田 親宏  
120 沼田 親宏  
121 沼田 親宏  
122 沼田 親宏  
123 沼田 親宏  
124 沼田 親宏  
125 沼田 親宏  
126 沼田 親宏  
127 沼田 親宏  
128 沼田 親宏  
129 沼田 親宏  
130 沼田 親宏  
131 沼田 親宏  
132 沼田 親宏  
133 沼田 親宏  
134 沼田 親宏  
135 沼田 親宏  
136 沼田 親宏  
137 沼田 親宏  
138 沼田 親宏  
139 沼田 親宏  
140 沼田 親宏  
141 沼田 親宏  
142 沼田 親宏  
143 沼田 親宏

和歌三神社献詠披露講祭

六月十三日午後二時、和歌三神社献詠披露講祭が祈禱  
殿にて執り行われました。県内外より短歌八十首、俳  
句五十六句の応募があり、短歌二十五首、俳句十八句  
がそれぞれ選ばれました。祭典では、入選者らの参列の  
もと斎行され、ご神前に選者代表が入選作品を奏上し、  
その後、表彰式が行われました。

選者  
短歌の部 小林峯夫 後藤すみ子 市川正子  
俳句の部 伊藤百雲 葦原月子



短歌の部/小林先生



俳句の部/葦原先生

(敬称略)

短歌の部

特徴

腰ひくく打者を見つめる真剣さ少年たちはミントのかおり  
大栗 紀美子

小刻みに漆黒の翅ふるわせて羽化ほやはの揚羽があるく  
白木 良子

憲法の九条変えず兵を遣る国訝しみ番茶手に揉む  
山田 真詩

秀逸

- ケアハウスに住み居る友は杖つきで見舞ひに通ふれを羨しむ 佐野 きく子
- 見送りにもてるひとりの部屋の扉に家族アルバムひらかれてあり 水谷 広海
- シンク口の選手さながら池の鯉同じ角度に口持ち上げる 辻絹江
- 目には蚊を耳には蝉を住まはせて九十二歳生きねばならぬ 鬼頭 一枝
- たづねりとカローリーハーフのマヨネーズかける矛盾を子は見逃さず 杉山 洋子
- 猫なりの考あるらしすり足にメダカの様子確かめにくる 伊佐地 博子
- 大雪に折れし桜のひと枝がぼつりと咲きたり祭りの朝 岩佐 ハル子
- 新緑を駆け抜けて行くロープウェイ 駆け抜けて逝つた夫との生活 石田 小夜子
- 田の水を見廻りに来し少年が草をちぎつて笛吹きて行く 野々村 政尚
- 反りのある柄の備中に地下足袋の足擦り寄せて蓮根田出る 梅村 成佳

入選

- 原田 良子 古田 司馬男 高尾 あき子 梶原 晴美
- 井上 秀夫 嶋田 操子 吉田 節子 桐山 俊雄
- 深貝 喜代子 棚橋 敏子 阿部 三男 木原 芳子

選者詠

- とりよる伊奈波の杜に湧きたちて光りかがよふ若きみどり葉 小林 峯夫
- 仰向きてラムネを飲みし夏ありき青い惑星ごとんと落とし 後藤 すみ子
- 日の入りて水田ひとときしらがねの深き無言は闇に入りゆく 市川 正子

俳句の部

特徴

焙じ茶の香る店先夏はじめ  
青谷 百合子

終戦に未完の地下壕草茂る  
寺田 好子

落下傘追ひしあの日の昼花火  
名和 よちゑ

秀逸

- 鶉鶯の匂ひを残す水の闇 佐藤 和男
- 若葉風和紙で整ふ巫女の髪 澤井 国造
- みづみの底まで見ゆる花筏 はやし 碧
- 池の面の眩しき広さ五月来る 新町 恵子
- 卒業生山羊に声かけ別れけり 園部 佳成
- 大夕焼城下に響く時の鐘 松原 政行
- 若葉風受けて卒寿はペダル踏む 杉野 ちゑ子
- 不器用に生きて夏の夜坐りだこ 矢橋 初美
- 城窓を掠め一閃夏つばめ 岡八 重子
- 老鶯やうねる山路の岩跡 小里 幸剛

入選

- 佐野 きく子 伊藤 英司
- 三輪 巴枝 堀口 千恵子
- 五十川 直靖

選者詠

- 青葉映ゆ山へ嘶く神馬像 伊藤 百雲
- 青葉若葉伊奈波の杜の優姿 葦原 月子

敬称略



# 一天地を開く

株式会社代表取締役社長

藤尾秀昭

ここに一冊の本があります。

『修身教授録』。

著者は森信三先生。五百三十ページを超える大冊です。初版は昭和十五年。国語教育の第一人者といわれた芦田恵之助氏が部厚い贈写版刷りを読み感動、全五巻にまとめ発刊し、当時の隠れたベストセラーとなりました。縁あって弊社がこれを新装出版したのが平成元年。いまでも熱心な読者を得てすでに四十版を重ね、驚異のロングセラーになっています。

昭和十二年、大阪天王寺師範専攻科で倫理・哲学を教えていた森信三先生は、本科一部生の「修身科」も受け持つことになりました。

先生は真に役立つ授業をと考えられ、検定教科書は使わず、自分で選んだテーマを口述、生徒に筆録させました。口述はもとも筆録の遅い生徒に



ルでも掘る手を止めねば、いつかは必ず貫通するようになります」

人はどんな境遇においても一天地を開くことができる。森先生の生き方が私たちに教えてくれているのはそのことなのです。

最後に、『修身教授録』に収められている森先生の珠玉の言葉をご紹介して稿を閉じます。

\*

大よそわが身に降りかかる事柄は、すべてこれを天の命として慎んでお受けをするということが、われわれにとっては最善の人生態度と思うわけです。ですからこの根本の一点に心の腰のすわらない間は、人間も真に確立したとは言えないと思うわけです。

合わせたといえます。

こうして古典的名著となる貴重な記録が残ることになりました。その中から昭和十二年四月、昭和十四年三月の二年分の講義を改めて編集したのが、弊社刊の本書です。

本書を読み返すたびに抱くのは、僅か一時間の授業でよくこれだけ濃密な内容を盛り込んだ講義ができたものだ、という感慨です。当時、先生は四十歳前後でした。

森先生は全身で授業に取り組み、一天地を開かれたのです。

森信三先生は明治二十九年、愛知県知多郡に端山家三人兄弟の末っ子として生まれました。祖父は第一回国議員であり、愛知県会議長を四期十六年も務めた地方の名士でした。しかし、先生が生まれた翌年に母が不

したがってここにわれわれの修養の根本目標があると共に、また真の人間生活は、ここからして出発すると考えているのです。

\*

真の「誠」は、何よりもまず己のつとめに打ち込むところから始まると言ってよいでしょう。すなわち誠に至る出発点は、何よりもまず自分の仕事に打込むということでしょう。

総じて自己の務めに対して、自己の一切を傾け尽くしてこれに当たる。すなわち、もうこれ以上は尽くしようがないというところを、なおもそこに不足を覚えて、さらに一段と自己を投げ出していく。これが真の誠への歩みというものでしょう。

\*

心がけというものは、だれ一人見るものはなくても、それが五年、十年とつづけられていくと、やがてその人中に、まごうことなき人間の光が身につき出すのです。

\*

縁となつて去り、先生は小作農の森家にもられました。養父母は共に律儀で実直な人でした。人柄の実直な夫婦にもられ育てられたことは、先生終生の感謝となりました。

小学校を首席で卒業するも養家の事情で中学受験を断念、母校の給仕となります。

十七歳で愛知第一師範入学。二十一歳で卒業。二十三歳で広島高等師範へ。ここを二十七歳で卒業し、二十八歳で京都大学哲学科(本科三年)入学。卒業後さらに大学院で五年間学び首席で卒業。

この年齢の嵩みは先生の苦学の軌跡を示すものですが、結局、京都で職に就けず、母校の広島高師にも迎えられませんでした。先生は住み慣れた京都を離れ、大阪郊外に移り住みました。その時、「天地の間にただ一人立つ」の感慨にむせんだといえます。

端山家から森家の養子となり中学進学を断念したのが第一の逆境なら、これは第二の逆境でした。しかし、こ

人間というものは、現在自分の当面している仕事をまず片付けて、しかるのち、余力があつたら、自分の根底を養うような修養をすべきでしょう。

\*

人間の天分というものは、単に自分本位の立場でこれを発揮しようとする程度では、十分なことはできないものであります。

ではどうしたらよいかというに、それには、自分というものを越えたある何物かに、自己をささげるという気持がなければ、できないことだと思おうのです。

\*

永続きしないものは決して真の力となるものではありません。

\*

「自己を築くのは自己以外にない」ということを、改めて深く覚悟しなければならぬと思います。すなわち、われわれの日々の生活は、この「自分」という、一生に唯一つの彫刻を刻みつつあるのだということを、忘れないことが何より大切です。

の逆境こそ森信三先生がその後の人生に一天地を築いていく礎になったのだと思われれます。

『修身教授録』の授業が行われていた頃、専攻科の生徒がやはり先生の授業内容や様子を記録していました。それは『森信三訓言集』として出版されています。その中にこういう言葉があります。

「人間は他との比較をやめて、ひたすら、自己の職務に専念すれば、そこに一天地が開けるものである。それは人は、全的統一の立場に立てば、すべて外なき故に独立自全、全体が小宇宙となり、一天地となるが故である」

「すべて人間というものは、たとえ頭脳は大した人ではなくても、その人が真に自覚さえすれば、一個の天地を開くことができるものです。だから人間は、世間的な約束事などには囚われないうで、自分のしたいことは徹底的にやり抜くんです。そうすれば、そこに二つの火が点されます。いかに長いトンネ



【プロフィール】

昭和53年の創刊以来、月刊誌『致知』の編集に携わる。

昭和54年に編集長に就任。

平成4年に代表取締役兼編集長に就任。

現在代表取締役兼編集長。

『致知』は「人間学」をテーマに一貫した編集方針を貫いてきた雑誌で、今年で創刊37年をむかえる。

有名無名を問わず、「隅を照らす人々」に標準をあてた編集は、オンリーワンの雑誌として注目を集めている。

主な著書に『現代の覚者たち』『小さな人生論1〜5』『心に響く小さな5つの物語』『人生の大則』『長の十訓』などがある。